

Ⅲ -1 重要文化財展示 記録

表3 重要文化財展示概要表

展示名	会期	会場	内容等
重要文化財展示第5期	令和7年7月29日 ～令和7年11月24日	青谷かみじち史跡公園 重要文化財展示室	重要文化財 40 点を展示。 4 期から全点を入れ替え。 全て史跡公園では初公開。
重要文化財展示第6期	令和7年11月26日 ～令和8年3月22日	青谷かみじち史跡公園 重要文化財展示室	重要文化財 33 点を展示。 5 期から 30 点を入れ替え。 23 点が史跡公園では初公開。
重要文化財展示第7期	令和8年3月24日 ～令和8年7月26日	青谷かみじち史跡公園 重要文化財展示室	重要文化財 34 点を展示。 6 期から 31 点を入れ替え。 11 点が史跡公園では初公開。

表4 重要文化財展示概要表

大テーマ	小テーマ	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期		第6期		第7期			
		遺物名称	遺物名称	遺物名称	遺物名称	ケース	遺物名称	ケース	遺物名称	ケース	遺物名称		
美の極み	木製品の造形	花卉高杯（杯）	花卉高杯（杯）	花卉高杯（杯）	花卉高杯	1	桶形容器	1	桶形容器蓋	1	花卉高杯（杯）		
		花卉高杯（脚）	花卉高杯（脚）	桶形容器					花卉高杯（脚）				
	木製品、土器などの造形	銅剣形骨角器	桶形容器	絵画のある琴	桶形容器	2	曲物	2	銅剣形骨角器	2	漆塗り装飾蓋		
		器台	器台	台付鉢	漆塗り装飾壺	3	装飾壺蓋	3	器台	3	漆塗り装飾壺		
					漆塗り装飾蓋		装飾壺			装飾壺蓋	装飾壺		
美の深み	祈り（祭る）	盾	盾	盾	盾	4	線刻絵画土器	4	琴	4	盾		
				盾			船団線刻板		琴				
				盾			線刻箱		琴				
				把手			陽刻板		琴				
		壺	壺	台付装飾壺	台付装飾壺	5	台付装飾壺	5	台付装飾壺	5	線刻絵画土器		
		ト骨	ト骨	ト骨	ト骨	6	船形木製品	6	小型土器				
		ト骨	ト骨	ト骨	ト骨		船形木製品		小型土器				
		櫛	櫛	簪	櫛	7	櫛	7	小型土器	6	器台		
		柄頭	柄頭	柄頭	簪		櫛		武器形木製品				
		交易（憧れる）	板状鉄斧	板状鉄斧	鋳造鉄斧	鋳造鉄斧	8	貨泉	8	無文土器	8	星雲文鏡	
						貨泉							
								貨泉					
		ものづくり（魅せる）	高杯	高杯	高杯	高杯	9	水差形土器	9	水差形土器	9	壺	
			椀形容器	蓋	高杯	アカ取り						土玉	
			柄付き鑿	鑿	袋状鑿	袋状鑿	10	皿形容器	10	高坏（土器）		土玉	
			扁平片刃石斧	扁平片刃石斧	扁平片刃石斧	扁平片刃石斧						土玉	
			柱状片刃石斧	柱状片刃石斧	柱状片刃石斧	柱状片刃石斧	11	容器の脚	11	杯形容器		土玉	
			鑿状片刃石斧	鑿状片刃石斧	鑿状片刃石斧	鑿状片刃石斧						土玉	
			ヒスイ勾玉	ヒスイ勾玉	蛇紋岩勾玉	蛇紋岩勾玉	13	ヒスイ勾玉	12	柄付き鑿	10	椀形容器	
			ガラス管玉	ガラス管玉	ガラス小玉	ガラス小玉		ガラス小玉			11	高杯	
			ガラス小玉	ガラス小玉	ガラス小玉	ガラス小玉		13	打製石剣	12	柄頭		
			ガラス小玉	ガラス小玉	ガラス小玉	ガラス小玉					柄頭		
		ガラス小玉	ガラス小玉	ガラス小玉	ガラス小玉	13					磨製石剣	13	ヘラ
		水晶算盤玉	水晶算盤玉	水晶算盤玉	水晶算盤玉								
		くらし（用いる）	離頭鉆	離頭鉆	離頭鉆	離頭鉆	14	単式釣針	14	離頭鉆	14	単式釣針	
			離頭鉆	結合式釣針（軸）	離頭鉆	ヤス		単式釣針		離頭鉆		単式釣針	
			離頭鉆	結合式釣針（針）	針	ヤス		単式釣針		離頭鉆		単式釣針	
			伐採石斧	ヤス	針入れ	骨鏃		アワビオコシ		ヤス		ヤス	
	匙		ヤス	匙	針	弭		ヤス		ヤス			
	匙		骨鏃	匙	針入れ	弭		ヤス		ヤス			
	腰かけ		伐採石斧	權	伐採石斧	木屐		槽・盤		匙			
	槽・盤		腰かけ	直柄又鋏	桙	火鑽臼		槽・盤		匙			
			槽・盤		權	腰かけ		腰かけ		直柄又鋏			
	加工（技）		壁板	床板	壁板	柱		15		鋤		15	矢板
		桙	梁	梁	權	矢板							
		桙	桙	扉板	梯子	權	矢板						
桙		桙			槽・盤	壁板							

は前回から引き続きの展示

重要文化財展示第5期 展示物紹介

ケース1

だいつきおけ
台付桶 弥生時代中期後葉～後期（紀元前1世紀頃～紀元1世紀）

ヤマグワの木をくり抜いて作られた脚台付きの桶形容器です。平面形は舟形をしており、美しい弧を描く側面形と細く削り込まれた脚台の透かしが秀逸な作品です。上端部には2箇所あなの孔が空いており、組み合う蓋があったことが推測できます。

ケース2

まげもの
曲物 弥生時代後期（紀元1世紀～2世紀頃）

モクレン属の木で作られた曲物の脚台部です。底部の周縁には段が設けられており、側板の一部が残っています。脚台部は裾広がりとなり、逆涙滴状るいてきの透かしが8個空けられています。表面に黒漆くろうしを塗った後、赤漆あかうしで平行線文などを描いています。

ケース3

だいつきつぼ
台付壺 弥生時代後期（紀元1世紀～2世紀頃）

木製の脚台付きの壺とその蓋ふたです。ともにクワ属の木をくり抜いて作っています。壺はそろばん玉のように胴部が外側へ張り出します。蓋は頂部につまみをもち、左右両側にも突起状とつきの装飾を作り出しています。壺と蓋には紐ひもを通す孔が空けられており、蓋をかぶせてみるとそれぞれの位置がぴったりと一致します。表面には部分的に赤色の顔料が残っており、元は赤く塗られていたことが分かります。

ケース4-1

サメが描かれた壺 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

壺形土器の肩に魚の絵が描かれています。絵は土器を焼く前に描かれており、非常にシャープな線で一気に描かれています。流線形りゅうせんけいの体、尖った頭部、強調された胸びれと尾びれ、ふたつの背びれといった特徴からサメを描いたものと思われます。サメの絵は全国的にはあまり例がなく、青谷上寺地遺跡ならではの画題といえます。

ケース4-2

サメが描かれた箱はこ 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

表面に8匹の魚が描かれており、体つきの特徴からサメだと思われます。サメは上向き、下向き、横向きに描かれ、躍動感を感じます。周縁には目釘孔めくぎあなが巡り、裏側には小口板こぐちをはめ込む溝が2箇所あなに彫られていることから、組合せの箱の一部だと思われます。

ケース4-3

せんだん
船団が描かれた板 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

海を進む船団を描いた木の板です。中央に3隻の小型船が、右に2隻の中型船が見えます。左下の欠損部には左右それぞれ斜めに立ち上がる線があり、大型船の船首せんしゅと船尾せんびだと思われます。小型船と中型船に描かれた縦線は、飛沫しぶきが船内に入るのを防ぐ蛇腹垣じゃばらかきではないかと思われます。

ケース4-4

りゅうすいもん
流水文が描かれた板 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

木の板の片側に水が流れるような文様を浮き彫りにより表現しています。

ケース5

台付壺 弥生時代後期中葉（紀元2世紀頃）

脚台付きの壺形土器です。算盤玉のように胴部が外側に張り出す形状が特徴的です。土器の表面は、斜線の向きを変えていく羽状文という文様などで飾り立てられています。また、表面には部分的に赤色の顔料が残っています。形状が木製の台付壺（ケース3）と非常に類似しており、用途などに共通性があったと考えられます。

ケース6

ふながたもくせいひん
船形木製品 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

木で作られた船の模型です。いずれも舷側に舷側板を取り付ける孔が空けられています。また船首と船尾に溝または段があり、たていた 縦板を取り付けるための加工と思われることから、この船形は じゆんこうぞうせん 縦板型準構造船を模していると考えられます。

ケース7

くし
櫛 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

木を削って作られた髪飾りです。左のものは9本の歯がありますが、先端付近のみ分離するよう削り出しています。頭部には せうとうかもん 双頭渦文や せうとうすいもん 流水文の装飾が見られます。右のものは6本の歯が根元まで分離するよう削り出しています。

ケース8

かせん
貨泉 弥生時代後期前葉（紀元1世紀）

古代中国新王朝で鑄造された青銅製の貨幣です。新王朝は短命に終わったため、鑄造期間は紀元14年～40年と短期間でした。片側に貨泉の文字が鑄出されています。

ケース9

みずさがたどき
水差形土器 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

算盤玉のように胴部が外側に張り出し、肩に横方向の把手が取り付けられています。口縁部は直立し、脚台を持ちます。口縁部から脚台部まで せいせんもん 凹線文と呼ばれる文様を施しています。

ケース10

さらがたようき
皿形容器 弥生時代中期中葉（紀元前2世紀頃）

木をくり抜いて作った皿形の容器です。平面形は船形をしており、両端部が ないわん 内湾して立ち上がります。底部には4個ずつの突起が2列に付されています。表面には部分的に赤色の顔料が残っており、元は赤く塗られていたことが分かります。

ケース11

きやく
容器の脚 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

イヌガヤの木で作ったものです。側面がノ字状に反り、上半部は はんさい 半裁した後、 おうめん 凹面状にくり抜いています。こ

の面に容器をはめ込んだものと思われます。頂部には紐または目釘で容器を固定するための孔^{あな}が空けられています。赤色の顔料で彩色されたていねいな作りのものです。右の1点は下半部に連続する三角文を2段にわたり施しています。

ケース 12

剣^{けん}の柄^{つか} 弥生時代中期（紀元前1世紀頃）

イヌマキの木で作られています。剣に取り付けられた握りの部分です。柄縁^{つかぶち}は紡錘形^{ぼうすいけい}にくり込まれており、ここに剣を差し込んで使いました。柄縁の外^{めくぎ}面は一段低くなっており、糸状の繊維が巻かれています。また目釘孔^{めくぎあな}がひとつ空けられています。

ケース 13

玉^{たま} 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

首飾^{くわだま}りなどに用いられた装身具^{そうしんぐ}です。勾玉^{まがたま}はヒスイ製、小玉^{こだま}はガラス製です。勾玉は大型で珍しいものです。

ケース 14-1

釣針^{つりばり} 弥生時代中期（紀元前1世紀頃）

軸^{じく}と針^{はり}を一緒に作る単式釣針^{たんしきつりばり}と呼ばれるものです。シカの角を素材としています。軸の先端には釣り糸が外れないように膨らみを持たせたりしています。右の1点は針の外側にカエシが作られています。

ケース 14-2

アワビオコシ 弥生時代前期後葉～中期前葉（紀元前4世紀頃～紀元前3世紀頃）

シカの角で作られた漁労具^{ぎやうろうぐ}です。薄く削ってヘラのようにした先端部を、岩に張り付いているアワビなどに差し込んで、てこの原理で剥^はがし取ったと思われます。

ケース 14-3

弭^{ゆはす} 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

弦^{げん}を引かけるために弓の両端に装着されたものです。シカの角で作られています。いずれも中空^{ちゆうくう}に作られており、左のものは下半部^{くつきよく}で屈曲し先端が尖っています。全体を平行線文と三角文で飾っています。右は段を設けて弦を引かける突起^{とつき}を作り出しています。

ケース 14-4

沓^{くつ} 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

スギの木をくり抜いて作っています。足の形に合わせて左右非対称になっています。左右両側面には紐^{ひも}で固定するための孔が2個ずつ空けられており、底部にはすべり止めのためと思われる溝が長軸に直交して3本彫り込まれています。

ケース 14-5

火鑽^{ひきりうす}臼 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

細長い木の角材を素材としています。火鑽杵^{ひきりぎね}を火鑽孔^{ひきりあな}に押し当て、回転運動による摩擦熱^{まさつ}により火種を作るものです。火鑽孔は11個あり、いずれも焼け焦げています。

ケース 14-6

^{こし}腰かけ 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

スギの木をくり抜いて作った大型の腰かけです。座板の両端は大きく反り上がります。脚部は3本削り出されており、横木で脚部をつなぐような加工が施されるなど、装飾性の高い作りとなっています。後ろ側は欠損しており、前側のみが残っています。

ケース 15-1

^{すき}鋤 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

土を掘り起こすための道具です。木製で一木を削り出して作っています。素材となった材は^{しんさりざい}芯去材で、身の部分は^{まさめ}柁目となっています。T字形の^{とって}把手を持ち、身の半分ほどが炭化しています。

ケース 15-2

^{かい}櫓 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

船を漕ぐ際に用いた木製の櫓です。身と^え柄は一木を削り出して作っており、別に作ったT字形の把手を組み合わせています。把手は^{めくぎ}目釘で固定しています。身は小さく幅も細めです。素材となった材は芯去材で身の部分は柁目となっています。

ケース 15-3

^{かい}櫓 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

一木を削り出して作った木製の櫓です。身は^{ぼうすいけい}紡錘形で、T字形の把手を持ちます。素材となった材は芯去材で、身の部分は柁目となっています。

ケース 15-4

^{そう}槽 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

一木をくり抜いて作った木製の大型容器です。身は長方形で、側板は外傾して立ち上がります。底部には円形の低い脚台があります。広い範囲が炭化していますが、細かな加工痕も残っています。

重要文化財展示室

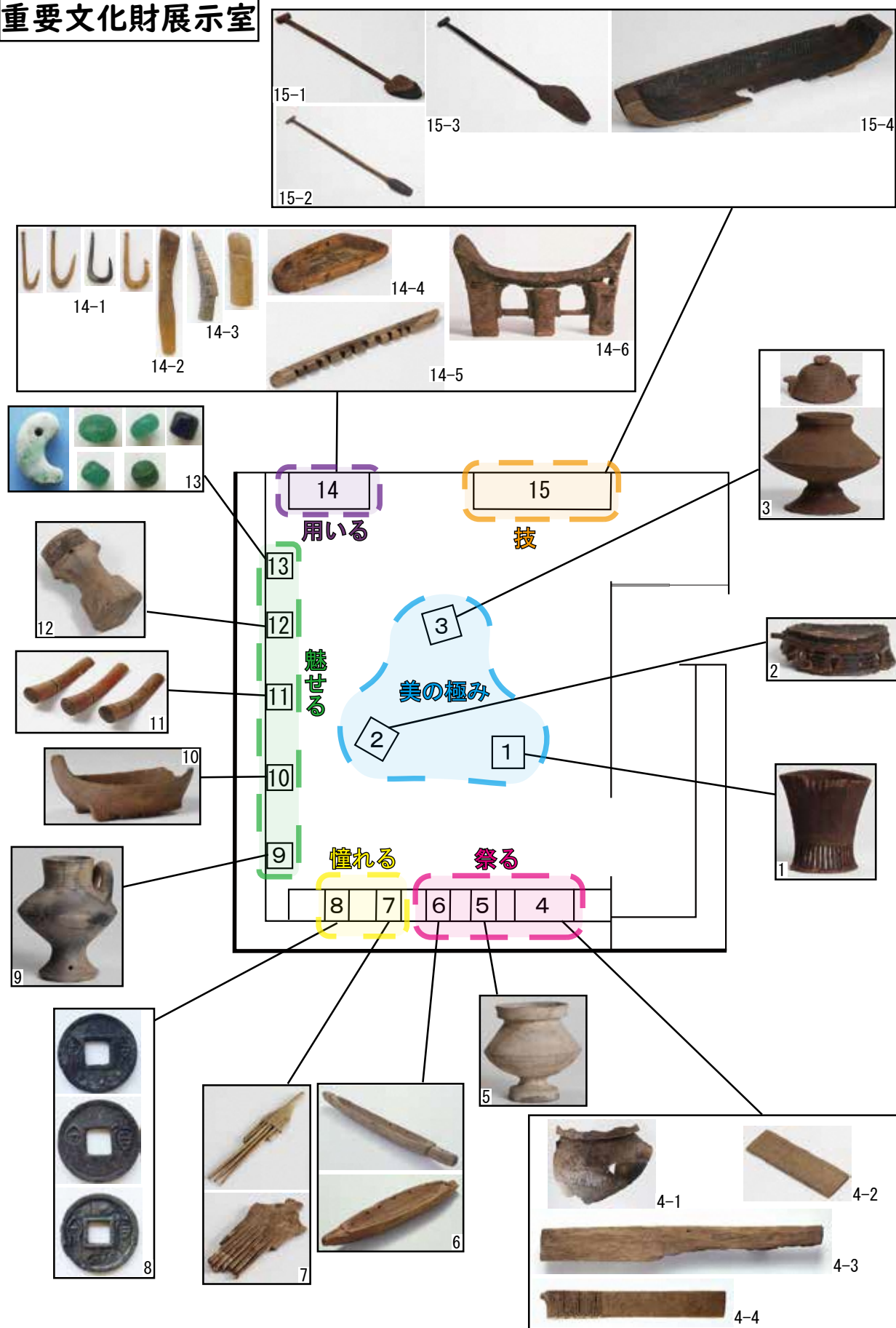


図 30 重要文化財展示第 5 期 構成

重要文化財展示第6期 展示物紹介

ケース1

だいつきおけ
台付桶 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

ヤマガワの木をくり抜いて製作された台付きの桶形容器です。蓋を伴って出土しました。平面形は舟形をしており、美しい弧を描く側面形が秀逸な作品です。容器と蓋の両端部には小さな穴が空いています。器の中に入れたものを大事に保管するため、紐で蓋を閉じていたのでしょう。また台の部分には両側面に各6本の透かしが彫刻され、底面には2個一対の6組の突起が左右対称に付されています。

ケース2

どうけんがたこつかくき
銅剣形骨角器 弥生時代前期後葉～中期前葉（紀元前4世紀～紀元前3世紀頃）

クジラの骨で作られた骨角製の剣です。青銅製の銅剣を真似たもので、実用の武器ではなく、祭祀に使われたと考えられています。樋と呼ばれる長軸方向の2本の溝や基部の孔など、銅剣の特徴をよく捉えています。

ケース3

きだい
器台 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

壺を載せるための台として製作された土器です。上下が広がる円筒形をしています。外面には赤く彩色された三角形の文様を上下3段に描いたり、凹線文と呼ばれる平行線文で飾ったりと装飾性の高い土器です。

ケース4-1

こと
琴 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

スギで作られた箱形の琴です。天板、底板、側板、小口板を組み合わせたもので、すべてのパーツが揃っているものもあります。天板には弦を張るための突起や集弦孔があるほか、側板には音を出すための孔が空けられています。突起が7本のものはやや大型品です。

ケース4-2

かいが
絵画が描かれた琴 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

天板には魚が描かれており、体つきの特徴からサメだと思われます。サメの絵は細く浅い線で刻まれており、躍動感を感じます。弦を張るための突起は6本で、折れた部分に音を出すための孔の一部が残っています。側板は中央に音を出すための孔が空けられており、その左右に動物が描かれています。中央の動物はシカと思われますが、その左右の動物については諸説あります。右2頭の頭部は2重円で表現されており、左2頭も元は同じ表現だったものを彫り直して形を変えています。

ケース5

だいつきつぼ
台付壺 弥生時代後期中葉（紀元2世紀頃）

脚台付きの壺形土器です。算盤玉のように胴部が外側に張り出す形状が特徴的です。土器の表面は、斜線の向きを変えていく羽状文という文様などで飾り立てられています。また、表面には部分的に赤色の顔料が残っています。同じ形状の木製台付壺もあり、用途などに共通性があったと考えられます。

ケース6

ミニチュア土器 弥生時代中期後葉～後期（紀元前1世紀～紀元2世紀頃）

極めて小型の土器で、実用品ではなく祭祀に使われたと考えられます。展示品は壺、甕、鉢を模したものです。モデルとなった実用品の特徴をよく表しており、作りも丁寧です。

ケース7

武器形木製品 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

木で作られた武器の模型です。銅剣を模したものは、身の幅を一部狭くしたり、基部に孔を空けるなど、銅剣の特徴をよく表しています。銅戈を模したものは身と柄を別に作り組み合わせています。

ケース8

無文土器 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

弥生時代に併行する、朝鮮半島の青銅器時代の土器です。粘土帯土器とも呼ばれ、口縁部に粘土を貼り付け、断面が三角形になるように成形しています。煮炊きに用いる日常の土器であるため、朝鮮半島と山陰地方の間で人の往来があったことをうかがわせるものです。

ケース9

水差形土器 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

算盤玉のように胴部が外側に張り出し、肩に横方向の把手が取り付けられています。口縁部は直立し、脚台を持ちます。口縁部から脚台部まで凹線文と呼ばれる文様を施しています。

ケース10

高坏 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

水平に伸びる口縁部が特徴の高坏です。口縁部には格子目状の文様を施し、脚台部は凹線文と呼ばれる平行線文や三角形の文様で装飾しています。木で作られた同じ形態の高坏もあります。

ケース11

角杯形容器 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

クワ属の木をくり抜いて作ったものです。底部が非対称に湾曲する珍しい形をしています。内面は底部近くまでくり抜かれており、かなり丁寧な作りです。朝鮮半島では紀元5世紀頃の角杯形容器が知られていますが、青谷上寺地遺跡のものはそれよりもかなり古いものです。

ケース12

鑿 弥生時代後期（紀元1世紀～2世紀頃）

木材を削ったり、彫ったりする作業に使われた鉄製の工具です。シカの角で作られた柄に装着して使用していました。柄には握った手が滑るのを防ぐための刻み目を施しています。柄に装着された状態で出土した例はほとんどありません。

ケース13

石剣 弥生時代中期中葉～後期（紀元前2世紀～紀元2世紀頃）

石で作った短剣です。打ち欠いて成形した打製石剣と、磨いて成形した磨製石剣があります。打製石剣は香川

県で採れるガラス質安山岩^{あんざんがん}を使っており、細かな打ち欠きによって形を整えています。磨製石剣は表裏両面に、長軸に沿った稜線を丁寧な研磨で作り出しており、横断面が菱形となっています。

ケース 14-1

離頭銛^{りとうもり}とヤス 弥生時代中期後葉～古墳時代前期前葉（紀元前1世紀～紀元3世紀頃）

いずれもシカの角で作られた漁労具です。離頭銛は紐^{ひも}を付けた銛頭^{もりがしら}を木の柄の先に取り付けて使用していました。銛が獲物に突き刺さると柄が外れ、銛頭につながる紐を引き寄せて獲物を捕らえていました。ヤスには突き刺した獲物が逃げないようにカエシを付けています。

ケース 14-2

盤^{ばん} 弥生時代前期後葉～後期（紀元前4世紀～紀元2世紀頃）

一木をくり抜いて、方形に成形された木製の器です。長方形のものや正方形のものがあり、大きさもまちまちであることから、様々な用途に用いられたと考えられます。装飾を施すことはなく、表面の仕上げも簡素ですが、いずれも均整のとれた形をしています。展示品のひとつには四隅に四角い脚を付けています。

ケース 14-3

腰かけ^{こし} 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

スギの木をくり抜いて作った大型の腰かけです。座板^{ざいた}の両端は大きく反り上がります。脚部は3本削り出されており、横木で脚部をつなぐような加工が施されるなど、装飾性の高い作りとなっています。後ろ側は欠損しており、前側のみが残っています。

ケース 15-1

矢板^{やいた} 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

矢板は土が崩れないための土留め^{どど}として用いられたもので、厚い板の一端を尖らせて地面に打ち込んでいました。展示品はいずれも大量の人骨が出土した溝の土留めだったものです。刃物で削った痕跡がはっきりと残っています。

ケース 15-2

壁板^{かべいた} 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

建物の部材と考えられる大型の板材です。厚さが1cmほどと大変薄いため、床板ではなく壁板と考えられます。弥生時代にはノコギリがないため、丸太に楔^{くさび}を打ち込んで割っていき、手斧^{ちょうな}で削って板材に仕上げています。表面には手斧による加工痕が残っています。

重要文化財展示室

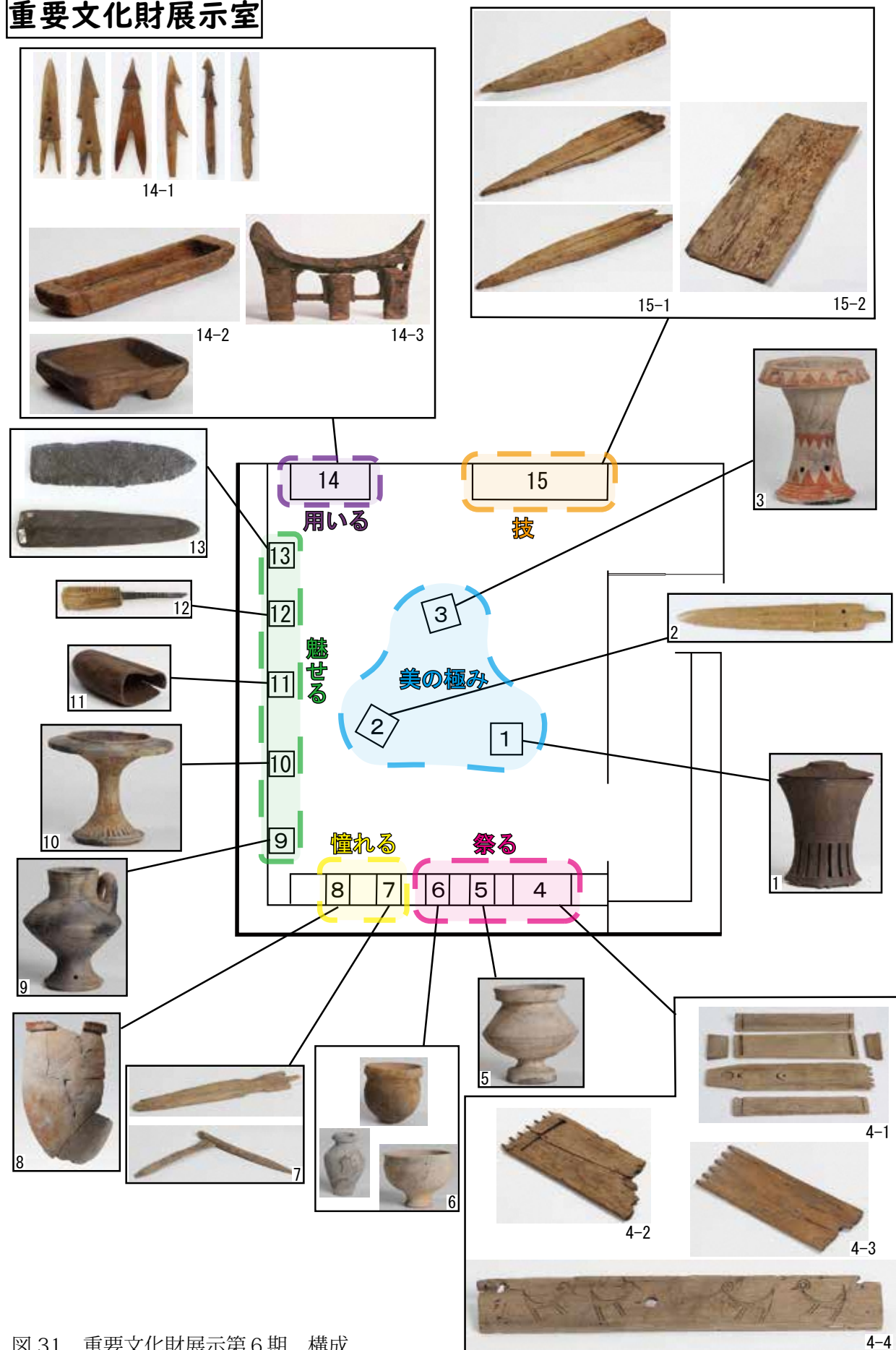


図 31 重要文化財展示第 6 期 構成

重要文化財展示第7期 展示物紹介

ケース1

^{たかつき}
高杯 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

堅く木目の美しいヤマグワの木から彫りだされた脚台付きの容器です。器の外面に花びらのような文様を彫りだしていることから、「^{かべんたかつき}花弁高杯」と呼ばれています。^{こうえん}口縁部の片側にある木葉形の飾り耳がデザインのアクセントになっています。裾が広がる脚台部には、円を12分割する位置に縦長の飾り孔が施されています。器面を水銀朱、ベンガラを用いた顔料で赤く彩色した、優雅な器です。

ケース2

^{だいつきつぽ}
台付壺 弥生時代後期（紀元1世紀～2世紀頃）

木製の脚台付きの壺とその^{ふた}蓋です。壺はサクラ属、蓋はモクレン属の木を素材としています。どちらも表面全体に黒漆を塗った後、^{くろうし}赤漆で様々な文様を描いています。文様は渦巻き状の文様や円を重ねた文様などを連続的に施しています。また、蓋の上面と壺の脚の付け根には、^{かべんたかつき}花弁高杯に見られるものと同じ花びら状の文様を描いています。弥生時代の漆工技術の高さがうかがえる逸品です。

ケース3

台付壺 弥生時代後期（紀元1世紀～2世紀頃）

木製の脚台付きの壺とその蓋です。ともにクワ属の木をくり抜いて作っています。壺を^{そろばん}算盤玉のように胴部が外側へ張り出します。蓋は頂部につまみをもち、左右両側にも^{とつき}突起状の装飾を作り出しています。壺と蓋には^{ひも}紐を通す孔が空けられており、蓋をかぶせてみるとそれぞれの位置がぴったりと一致します。表面には部分的に赤色の顔料が残っており、元は赤く塗られていたことが分かります。

ケース4

^{たて}
盾 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

美しい文様で飾られた盾です。モミの木で製作されています。割れや反りを防ぐため、^{もくめ}木目と直交する方向に紐を通して補強しています。また、丸い形をした上部には、端部を保護するための保護材を縫い付けるための細かな孔列があります。左右に渦巻状の文様と三角形の文様を施し、その周囲を^{すいぎんしゆ}水銀朱で赤く彩色しています。実戦用ではなく、儀式に用いられたものかもしれません。

ケース5

サメが描かれた壺 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

壺形土器の肩に魚の絵が描かれています。絵は土器を焼く前に描かれており、非常にシャープな線で一気に描かれています。^{りゅうせんけい}流線形の体、尖った頭部、強調された胸びれと尾びれ、ふたつの背びれといった特徴からサメを描いたものと思われます。サメの絵は全国的にはあまり例がなく、青谷上寺地遺跡ならではの画題といえます。

ケース6

^{きだい}
器台 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

壺を載せるための台として製作された土器です。上下が広がる円筒形をしており、壺を載せるところは大きく外側に広がっています。外面は赤く彩色されたり、^{おうせんもん}凹線文と呼ばれる平行線文で飾ったりと装飾性の高い土器です。

ケース7

じんめん 人面を表現した石製品 せきせいひん 弥生時代後期（紀元1世紀～2世紀頃）

かるいし 軽石を加工して人面を表現しています。目は楕円形に、口は開いた状態に彫りくぼめています。鼻は縦に2本の線を刻み、それぞれの外側を彫りくぼめることによって立体的に表現しています。顔の後側を突出させており、何かに取り付けて使ったものと思われます。

ケース8

せいどうきょう 青銅鏡 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

古代中国前漢王朝で鑄造された、せんかん 星雲文鏡と呼ばれる青銅製の鏡です。元々の大きさのほぼ4分の1に分割されています。分割された面は磨かれています、タガネのようなもので分割した痕が残っています。弥生時代の遺跡から見つかった星雲文鏡としては9例目ですが、九州以外で見つかった初めての例であり、とても貴重なものです。

ケース9

どだま 壺と土玉 そろばん 弥生時代中期後葉（紀元前1世紀頃）

そろばん 算盤玉のように胴部が外側に張り出す形をした壺形の土器です。口の部分は胴部から上に伸びて、内傾する面を持っています。この壺の中には粘土を丸く成形した土玉が24個入っていました。土玉は径が3cmほどで、いずれもあな 孔が空けられています。青谷上寺地遺跡では木の枝を細く削って輪を作り、そこに土玉をひとつ通したものが多数見つかっています。

ケース10

わん 椀 弥生時代後期（紀元1世紀～2世紀頃）

両側とってに把手が付いた木製の器です。イヌガヤの木をくり抜いて製作したもので、一方には突起が付いた大きな把手、もう一方には小さな把手を削りだしています。器面はきれいに磨かれており、赤い顔料で彩色されていた痕跡があります。

ケース11

たかつき 高杯 弥生時代後期（紀元1世紀～2世紀頃）

えんぱんがた 円盤型の飾りが付いた木製の器で、裾広がりの脚台部が付いています。ケヤキの木をくり抜いて製作したもので、脚台部には縦長の飾り孔が等間隔に並んでいます。退色していますが、本来は赤い顔料で彩色されていました。

ケース12

ぎじょう かざ 儀杖の飾り 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元1世紀～3世紀頃）

曲線的な文様を組み合わせた、左右対称のデザインが美しい装具です。素材はシカの角です。内部がくり抜かれ、めくぎあな 目釘孔があることから、儀式用の杖に取り付けられた飾りだったと考えられます。

ケース13

ヘラ 弥生時代前期後葉～中期前葉（紀元前5世紀～紀元前4世紀頃）

動物のちようこつ 長骨で作られたものです。一方の端部を尖らせ、もう一方の端部には装飾を施しています。丁寧に作ら

れていますが、尖った方の端部は器面に荒れが見られ、この部分で何かをこすためのヘラと考えられます。

ケース 14-1

^{つりばり}
釣針 弥生時代中期（紀元前 1 世紀頃）

^{じく はり} 軸と針と一緒に作る^{たんいつつりばり}単式釣針と呼ばれるものです。シカの角を素材としています。軸の先端には釣り糸が外れないように膨らみを持たせたりしています。右の 1 点は針の外側にカエシが作られています。

ケース 14-2

ヤス 弥生時代中期後葉～古墳時代前期前葉（紀元前 1 世紀～紀元 3 世紀頃）

シカの角で作られた^{ぎょううぐ}漁労具です。魚を突き刺して捕える漁に使う「ヤス」の先端部分で、3・4 本に枝分かれた柄の先端に取り付けて使用されていました。刺突した魚に逃げられないように、左右両側面は交互に鋭いカエシが並んでいます。

ケース 14-3

^{さじ}
匙 弥生時代中期後葉（紀元前 1 世紀頃）

木製の匙です。ひとつの木をくり抜いて作られています。何かをすくう^み身の部分や持ち手である柄の形や大きさが、ひとつひとつ異なっており、デザイン性に富んだものとなっています。

ケース 14-4

^{なおえまたぐわ}
直柄又鋤 弥生時代後期～古墳時代前期前葉（紀元 1 世紀～3 世紀頃）

木製の鋤です。柄と刃先の一部を除いて、ほぼ全体の形状が分かる良好な資料です。身はカシ、柄はスギを素材にしています。刃先が 4 本に分かれており、土を崩したり耕したりするために用いられました。

ケース 15

^{かべいた}
壁板 弥生時代中期後葉（紀元前 1 世紀頃）

^{きりづまづく}切妻造りと呼ばれる屋根形状の建物に用いられた壁板です。素材は大きなスギの木です。屋根の勾配に合うように、壁板の両側は傾斜しており、端部には屋根に取り付けるための小孔が開けられています。^{ちょうな}手斧で仕上げられた痕跡がリズミカルな凹凸となって残っています。

重要文化財展示室

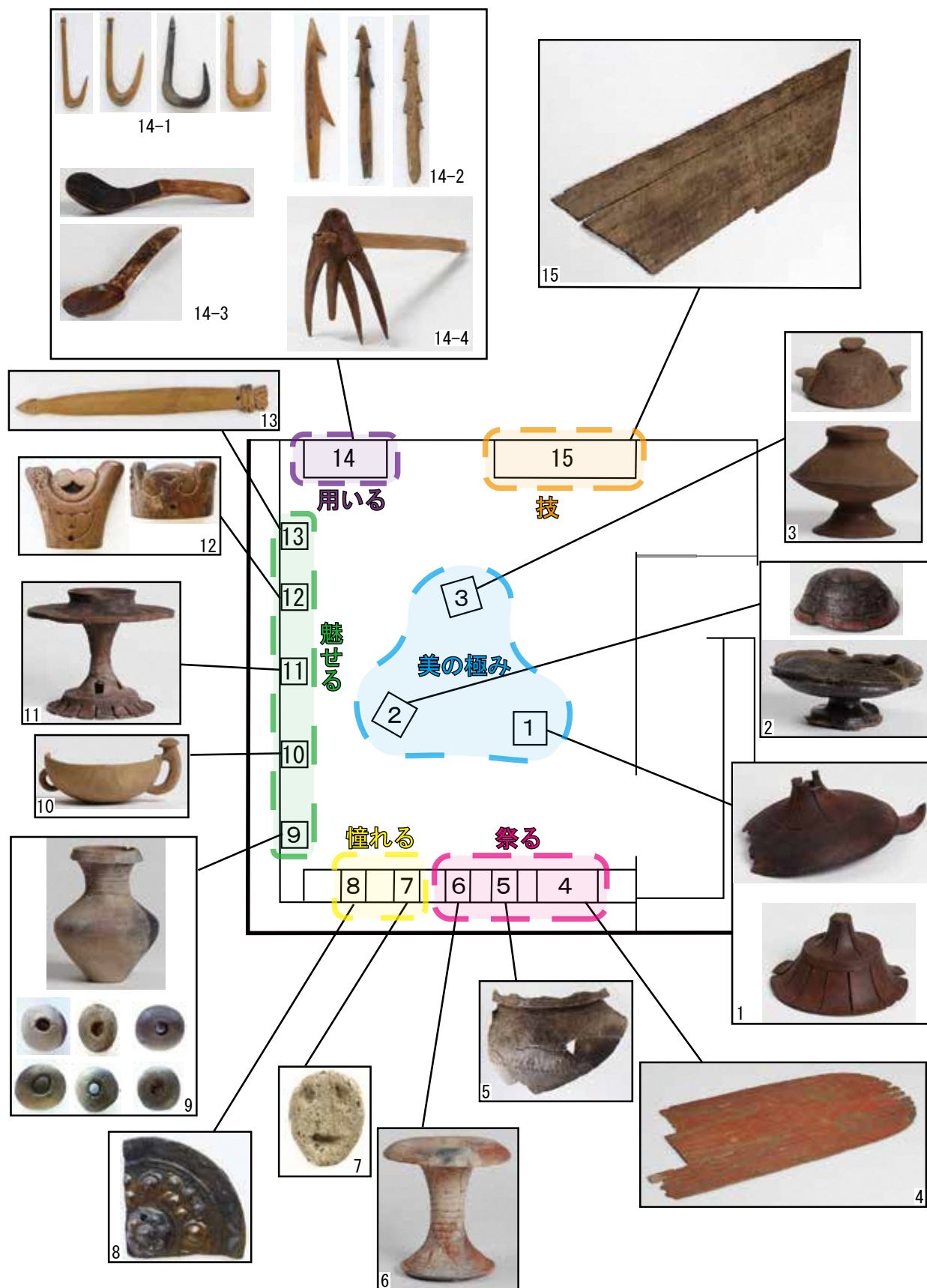


図 30 重要文化財展示第 7 期 構成